

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 12 月 1 日現在

機関番号：35310

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350735

研究課題名(和文) 子どもの死の認識と自尊感情を育む教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of Educational Program for Self Esteem and Death Knowledge on Children

研究代表者

近藤 卓 (KONDO, Taku)

山陽学園大学・総合人間学部・教授

研究者番号：60266450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)： 基本的自尊感情が死の認識に関係することが、これまでの研究で明らかとなっている。本研究では、基本的自尊感情得点は小学4年生から高校3年生の全学年において、女子と比べて男子の方が高く、男女学年による差は認められなかった。

そこで、今回は中学生を対象とした授業を行い検証した。基本的自尊感情「低群」に該当する生徒は、男女ともに、全体の20%強の割合で存在していたが、今回開発した基本的自尊感情を育む授業において、その効果を調べたところ、介入群において事前と比べて1カ月後の方が高い得点であり授業の効果が認められた。今回開発した教育プログラムに、一定の意義が認められたと考えられる。

研究成果の概要(英文)： Firstly we found the relation between Basic Self-Esteem and the knowledge of Death on school children. Recent study found that Basic Self-Esteem point were equivalent from grade 4 of the primary school to grade 3 of the high school students.

Therefore some educational Programs for Self Esteem and Death Knowledge on Children was operated at one junior high school located in the west of Japan.

Consequently we found the effect of growing up the Low Basic Self-Esteem points on Juniou high school students.

研究分野：健康教育学・臨床心理学

キーワード：児童・生徒 死の認識 自尊感情 教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

近年、小中学校をはじめとする学校現場で、児童生徒の自尊感情の低さが懸念されている(河地、2003)。また、それを学年間で比較すると、上級学年になるにしたがって下がる傾向が報告されている(近藤、2010)。

わが国で議論される子どもや青少年の自尊感情については、諸外国との比較で語られることもある(近藤、2010)し、かつて子どもであったおとなたちとの比較で語られることもある。いずれにしても、最近の子どもは自尊感情が低いあるいは弱い、といった言説がそこそこで合言葉のように発せられている。

一方で、この分野の研究における先進国であるアメリカでは、すでに“セルフ・エスティーム運動”とも言うべき状況が衰退の道をたどり始めている。セルフ・エスティームを高めれば学業成績が向上すると信じてきたけれども、そうはならなかったということが原因であろうとの議論がその背景をなしている(近藤、2012)。つまり、わが国で自尊感情に対する関心が高まってきたのと相反して、アメリカでは自尊感情に対して懐疑的な動きが出てきているのである。

自尊感情については、1890年のウィリアム・ジェームズ(James, 1890)による『心理学原理』以来、ローゼンバーグ(Rosenberg, 1989)やクーパースミス(Coopersmith, 1958)らの理論へと議論は連綿と続いている。ジェームズは、その著書“*The Principles of Psychology*”において自尊感情について述べ「自尊感情 self-esteem」=「成功 success」÷「要求 pretensions」という公式で定義を行っている。

筆者らは、自尊感情には二つの側面があることを前提としており、上記のような日常的

な意味での「自尊」の語の意味の二重性とも符合すると考えられる。こうした自尊感情の二つの側面を、筆者らは基本的自尊感情(BASE; Basic Self-Esteem)と社会的自尊感情(Social Self-Esteem)と表現している(近藤、2010)。基本的自尊感情は、他者との比較や相対的な評価によるものではなく、いわば絶対的で無条件の感情として心の内に存在するものである。つまり、「生きていていい、このままでいい、これ以上でも以下でもない、自分は自分」といったように、ありのままに自分自身を受け入れる感情であり、他者との比較でなく、絶対的、無条件、根源的で永続性のある感情であるともいえよう。

それに対して社会的自尊感情は、他者との比較によって相対的なものとして形成される感情であり、「とても良い、できることがある、役に立つ、価値がある、人より優れている」といったように他者の存在を前提としており、他者との比較で、どこまでも際限がなく、相対的、条件付、表面的で一過性の感情である。

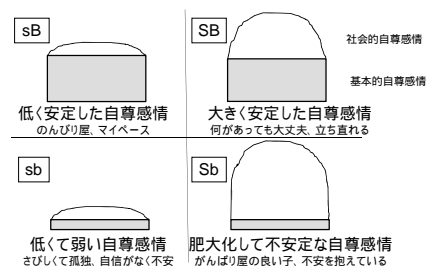


図1 自尊感情の四つのパターン

自尊感情を測定する尺度は複数存在し、もっとも広く用いられているものは、ローゼンバーグ(1989)の自尊感情尺度である。それに対して、筆者らは近藤(2010)の開発した自尊感情尺度SOBA-SETを用いて、小中学生の自尊感情(基本的自尊感情と社会的自尊感情)の調査を進めている筆者らは、ただ単に自尊感情が低いということの問題性よりも、その内実としての基本的自

尊感情と社会的自尊感情のバランスが重要であって、とりわけ問題なのは基本的自尊感情の低い状態であると考えている。

図1でいえば、SBタイプが一つの理想形であって、sbタイプやSbタイプなどの基本的自尊感情の低いタイプが心配される群である。とりわけ、Sbタイプは一見して高い自尊感情の値を示すが、その内実の大半が社会的自尊感情であることから、不安定で傷つきやすい自尊感情の状態であるといえよう。

2. 研究の目的

(第1部)これまで筆者らは基本的自尊感情を育むための教育実践を、小中学校で展開してきた(望月、2013)。今回は、こうした教育実践で用いるためのフェルト製の教材の開発を企画した。数回の授業を受けた後に、教室など身近な場所で児童生徒が自由に触れながら、学んだ事柄を体感的に理解し深めていくことを狙いとしている。

(第2部)本報告では死の認識に関する部分は省略し、自尊感情を高める要因とは何かという視点から、自尊感情を「基本的自尊感情」と「社会的自尊感情」とに分類して捉え直し、「共有体験」は「基本的自尊感情」を高める、という仮説のもと、基本的自尊感情が低いと考えられる子どもに焦点をあてて「共有体験」を導入した授業を実践し、授業実施前後の自尊感情を測定して比較検討することで、「共有体験」が「自尊感情を高める」ことを明らかにする。

3. 研究の方法

(第1部)臨床心理学専攻の大学教員1名、中学校の養護教諭1名、臨床心理学専攻の大学院生1名、心理学専攻の学部生2名によってブレインストーミングを繰り返し、そこから得られたラフ・スケッチをもとに、

フェルト手芸の専門家に依頼して試作品を作成した。

(第2部)

1) 調査協力校の特色と連携

調査協力校は中国地方の大学附属のA中学校である。市内の中心部からやや離れた地域に位置し、大学のキャンパスと同敷地にあり、附属小学校に隣接している。

2) 調査対象

調査対象は、A中学校2年生の全4クラス(男子68名、女子89名)である。

3) 調査方法

介入群には、介入授業の前日(以下、「事前」)に調査を行い、その翌日から1日1コマの授業を4日間連続で行った後、授業後(以下、「事後」)に自尊感情の調査を行った。さらに、その後の自尊感情がどのくらい保持されているかどうかを見るために、授業実施の1ヶ月後(以下、「1ヶ月後」)にも同様に調査を行い、全3回の自尊感情を測定して、比較検討した。

4) 評価尺度

本研究における自尊感情の評価尺度については、「社会的・基本的自尊感情尺度(SOBA-SET: Social Basic Self-Esteem TEST)」を用いた。

5) 実践内容

授業は「総合的な学習の時間」を活用し、4コマを1単位として構成した。授業実施者は調査協力校の養護教諭1名である。

4. 研究成果

(第1部) SOSEを表現するためのパーツを、厚紙を用いて複数の形状で作成し、複数の色彩のフェルトで包んで仕上げた。褒められたり認められたり評価されたりした際に高まる思いが、一つ一つのパーツによって表現されている。

また、BASEを表現するための円盤状のパーツを、スポンジを用いて4個作成し、BASEの積み重ねを表現するために、複数の色彩

のフェルトを側面に張り付けて仕上げた。共有体験の際に感情の共有ができると、その時の思いが積み重なって厚みを増していくというイメージで、明るく暖かい感情を暖色系のフェルトで、悲しさや辛さなどの感情を寒色系のフェルトで表現している。

机上で学んだ自尊感情の成り立ちを、具体物で視覚と触覚を用いて体感的に理解を深めることが期待できる。授業そのものが、もともと「感情」という心のあり様、つまり目に見えないものを扱っており、さらには構成概念としての SOSE と BASE の状態を理解させたいという意図で行われる。教育学や心理学において、さまざまな構成概念を学んだ経験のある学習者であれば、言葉による説明や図示したもので、十分な理解が可能かもしれない。しかしながら、それを中学生が理解するためには、やはりより具体的なものを活用することが有効であろうと考えられる。

そうした意味で、具体的には保健室での保健指導や、保健学習の授業での教材としての活用が期待できる。自信を失ったり揺らぎを感じて保健室を訪れる児童生徒は少ない。そうした児童生徒と養護教諭が面談して、自らの心のありようを理解させたり、ひいては自信をつけさせたりするような活動が、初等中等教育の現場では日常的に行われている（山田、2014）。そうした保健室での日常の支援活動の際に、手遊びのような形でこの「フェルトそばセット」が活用できるのではないかと期待される。養護教諭と共に触れるだけでなく、保健室に同室した仲間と共に具体物に触れることによる共有体験の効果も期待できよう。また、繰り返し触れることによる復習効果が期待できる。彩や大きささらには柔らかさなどから、常に目に触れる場所に設置しておけば、子どもの手が自然に伸びて触りたくなるような物となっている。おそらく、

何度も手で触れてさまざまな遊び方をすることが想像される。そうした自主的・主体的な繰り返しの遊びを通して、自尊感情に対する理解がより深まり、確実なものとなって行くことが期待できる。

（第2部）得られたデータのうち、欠席による未提出や無回答による尺度得点算出不可を除外し、事前調査における男女および介入・対照群の得点比較ならびに基本的自尊感情「低群」の各時点における介入・対照群の得点比較については対応のないt検定にて、介入・対照群における授業の主効果および交互作用については2元配置分散分析にて、介入前後の変化量については対応のあるt検定にて比較検討した。データの情報処理及び分析は、統計解析ソフトウェア IBM SPSS Statistics ver21.0 for Windows を使用し、有意水準は5%以下とした。

1) 基本的自尊感情における男女差

男子と女子に差があるかどうかを検討するため、基本的自尊感情得点を算出し、平均得点の差の検定を行った。その結果、女子よりも男子の方が得点が高い ($p < .05$) という結果が得られた。よって、以後の分析は男女別に行うものとした。

2) 基本的自尊感情得点における介入群と対照群の差

介入群と対象群に差があるかどうかを検討するため、男女それぞれについて、基本的自尊感情得点を算出し、平均得点の差の検定を行った。その結果、介入群と対照群の平均得点に有意な差は見られなかった。

3) 基本的自尊感情「低群」における介入群と対照群の得点比較

基本的自尊感情「低群」の抽出については、事前の調査結果より判定を行った。その際「低群」の判定においては、平均値と標準偏差を用いている。「平均値 - 標準偏差」をカットポイントとして、それ以下の

値を「低群」とし、それ以上の値を「高群」とした。その結果、男子の低群が1点~15点であり、女子の低群が1点~13点であった。

本研究においては、自尊感情を高める要因は何かという視点から、基本的自尊感情が低いと考えられる子どもに焦点をあて、「共有体験」を取り入れた授業を実施し、授業前後の自尊感情を比較することで「共有体験」は「基本的自尊感情を高める」ことを明らかにするという目的を設定した。

その結果、授業実施前後の得点比較において以下の2点が明らかになった。

1. 女子の介入群と対照群の対象間において、それぞれの全3回における基本的自尊感情

得点の平均値に有意な差が認められた。

($p<.05$)

2. 女子の介入群と対照群の全3回の基本的自尊感情得点の平均値において、各測定時期

間に有意な差が認められる傾向にあった($p<.10$)

以上の結果から、「共有体験」を導入した本授業は本研究の焦点として定めた、基本的自尊感情が低いと考えられる子どもの女子において、効果があったと結論づけることはできないが、介入群と対照群に客観的な得点差があることを考慮すると、本授業が何らかの影響を及ぼした可能性も考えられる。

本研究の限界とそこから生じる今後の課題は次の2点である。第1に、授業展開の工夫の不足である。本授業のグループワークにおいては、生徒同士の発言のしやすさを考慮し、通常の授業と同様の班構成で実践した。しかしながら、実際の場面では、班によってグループワークにおける積極性に差が見られ、本来、基本的自尊感情が低いと考えられる生徒において、適切な共有

体験がなされなかった可能性も考えられる。今後はそのような差が生じることなく、生徒全員に適切な共有体験がなされるよう、生徒の特徴に応じて、グループワークのメンバーをあらかじめ構成する等の工夫が必要と考える。第2に、対象の少なさである。本研究においては、基本的自尊感情が低群に該当する生徒に焦点をあてていたが、実際に分析対象となった生徒は少数であり、検定結果における検定力の不足も考えられる。今後は、対象数を増加させることや、複数の学校で実施することで、本授業プログラムの効果がより明確になると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

【論文】

望月美紗子、近藤卓、宮森隆(2016). 社会的・基本的自尊感情尺度の妥当性と信頼性の検討. いのちの教育, vol.1, no.1, 41-50

近藤卓、望月美紗子、山田由美子、田淵愛子、田中佑果(2016). 中学校におけるいのちの授業の実践的研究～基本的自尊感情の育成に着目した効果測定から～. 山陽論叢, 第22巻, 63-70

近藤卓、山田由美子、田淵愛子、望月美紗子(2015). 基本的自尊感情理解のための小中学生用教材の開発～フェルト製教材の作成と期待される効果～. 山陽論叢, 第21巻, 159-164

【図書】

近藤卓編著(2015). 乳幼児期から育む自尊感情. エイデル研究所

近藤卓編著(2014). 基本的自尊感情を育てるいのちの教育. 金子書房

〔雑誌論文〕(計 3 件)

〔学会発表〕(計 9 件)

〔図書〕(計 2 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 卓 (KONDO, Taku)
山陽学園大学・総合人間学部・教授
研究者番号：60266450

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()